

周辺の  
みどころ

横田渡常夜燈を含む一帯は、「横田常夜燈公園」として整備されている。横田渡にはもう1基の常夜燈が現存しており、下流の対岸約700mの地点、湖南市三雲の旧東海道沿いに所在する。安永8年(1779)の銘があり、泉側の常夜燈よりも40年前に建立されたことがわかる。この常夜燈の南側に迫る横田山の先端には、三上藩の庄政に対して、検地10万日の日延べを勝ち取った天保義民を顕彰する、天保義民之碑がそびえる。



三雲側の横田渡常夜燈 天保義民之碑



よこ 横 田 渡  
わたし  
甲賀市水口町泉



公園として整備されている横田渡の常夜燈

琵琶湖に注ぎ込む河川は、現在約460本あるが、流域面積が最も広い県内最大の河川が野洲川である。野洲川は「近江太郎」とも呼ばれる暴れ川で、特に支流の杣川との合流地点に近い横田渡の周辺は、流れも激しくなっている。

横田渡は東海道石部宿と水口宿の間、鈴鹿山脈に源を発する野洲川と東海道が交わるところにある。ここで紹介する横田渡の常夜燈は近江東海道最大の渡河地点に位置しており、道行く旅人たちに対し、横田渡の存在を知らしめるランドマークだったのである。



[アクセス]

- 横田渡常夜燈  
JR草津線三雲駅下車、国道1号横田橋を渡り、最初の信号交差点を右折徒歩約5分。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]  
(関連文献/関連施設)

- 滋賀県教育委員会『中近世古道調査報告3 東海道(一)』
- 滋賀県教育委員会『中近世古道調査報告3 東海道(二)』
- 甲賀郡教育会『甲賀郡志』上巻



横田渡の常夜燈の眼下を流れる野洲川



横田渡の常夜燈全景

## 横田渡

所在地 甲賀市水口町泉

### 野洲川の川渡し

横田渡は野洲川でも川幅が最も広い場所であり、川幅は約320mを測る。

東海道を旅する人々にとっては、横田渡で渡河しなければ、東西それぞれの目的地へと達することはできなかった。しかも、横田渡には基本的に架橋はなされておらず(冬場だけ土橋を架けた)、人々は小船による渡河しかできなかったのである。

これは街道および宿駅制度を整備した徳川幕府が、軍事的理由から規模の大きい河川には架橋させなかったことが理由とされている。流れがきつく、また渡河に制限のあった横田渡は、「東海道十三渡」とも呼ばれる東海道中の難所のひとつだった。江戸時代中期の正徳年間(1711～1716)以降は、幕府は毎年10月から翌年2月末まで橋梁(土橋)を架すほかは、残りの期間は、4艘の小船で旅人を乗せて船渡しをしていた(うち2艘は予備)。

### 常夜燈について

横田渡常夜燈は、文政2年(1819)3月に泉村庄屋が水口藩大庄屋に宛て常夜燈建立を藩に上申してもらおうよう願書を提出したことに始まる。3年後の文政5年(1822)8月には、高さ8.1mの、東海道筋では最大規模を誇る巨大な常夜燈が完成した。発起人は萬人講の甲賀講中世話方であるが、基壇部には近江国内(高島郡・朽木谷)のほか、江戸・大阪・京都・播磨等の人々の名前が記されており、各地からの寄進を受けて建立されたことがわかる。また、安全加護を祈るため水運と関わりの深い「金毘羅大権現」の名を竿部に刻むとともに、同地に金刀比羅宮を勧請している。

巨大な常夜燈は外国人の目をも驚かしたようだ。ドイツ人の医師・博物学者であったシーボルトは、オランダ商館の医官として来日間もなくの文政6年(1823)2月に、江戸参府の途上でこの常夜燈を目にして、「この川岸(野洲川)に



竿部に刻まれた「金毘羅大権現」



基壇部に刻まれた寄進者の「萬人講中」



横田橋と常夜燈の古写真

は金毘羅さまを記念した石燈籠という燈火をともし大きな台がある」(『江戸参府紀行』)、とその著書に記している。

明治に入り、徳川幕府による宿駅制度は廃止されるが、横田渡しに橋が架けられるようになるのは、もう少し後のことである。

現在、常夜燈の傍らに基礎部のみ残る横田橋は、明治24年(1891)に滋賀県により架けられた。

明治29年(1896)9月には、野洲川の氾濫により常夜燈が倒壊する。その後、河川敷には堤防が設けられ、常夜燈は堤防の外に移して再建された。

いっぽう横田橋も通行人の便に供していたが、昭和4年(1929)には下流に横田橋が新たに架けられ、その機能を終えた。